

茨城県における図書室登校の実態

飯泉 歩

全国的に不登校生徒人数が増加しているなか、文部科学省は「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLO プラン)を取りまとめた。具体的な取り組みの一つとして挙げられている校内教育支援センターは、不登校の防止や学びの場の確保、教室復帰へのステップとして期待されている。この校内教育支援センターの定義および支援内容は、別室登校の定義及び支援内容とよく類似しており、これを鑑みると、国を挙げて別室登校(校内教育支援センター)を支援する機運が高まりつつあると思われる。別室登校の実施の場としては保健室や空き教室のほかに学校図書館も用いられている。学校図書館は保健室とは違った「心の居場所」であり、保健室登校だけではカバーできない生徒への支援として一定程度有用であると思われる。その実態等を調査・分析することで、生徒それぞれの属性や環境にあった別室登校支援を提供でき、教室復帰へ繋がれると考える。そこで、本研究では、別室登校の中でも、特に学校図書館で行われる図書室登校に着目する。

本研究の目的は、図書室登校の実数はどの程度か、どのような形態で行われているか、それぞれに特徴はあるか、実施に影響する要素は何か、他の別室登校と比較した際の利点・独自性は何かを一般性を持ったデータを収集することである。研究手法としては、茨城県の通信制学校を除く、中学校および高等学校の合計 397 校を対象とした質問紙調査(郵送)を行った。質問紙は、回答者の所属する学校に関する設問、図書室登校やその他別室登校を行う生徒数に関する設問、学校図書館の運営に関する設問等で構成されている。得られた回答は、単純集計を行い、重要と思われる回答および回答者の属性ごとに詳細な分析を加えた。

有効回答数 100 校のうち 3 校(過去に実施していた学校も含めれば 7 校)で図書室登校の実施が確認され、図書室登校を実施している 3 校では実施形態がそれぞれ異なっていた。具体的には、他の別室登校と併用しながら主に「図書室内での読書」を実施している A 校、別室登校の場を学校図書館に集中させて「図書室内での課題」と「個別指導(学習)」を実施している B 校、他の別室登校と併用しながら主に「図書室内での課題」を実施している C 校の 3 つの実施パターンが明らかにされた。このように、各学校の事情や環境に応じて最適な実施パターンは異なるものの、図書室登校の有用性については一定程度評価され、別室登校の場所として位置付けられている可能性が見出された。この時、図書室登校の実施には学校司書など学校図書館常駐職員の有無、学校図書館の開館時間帯、職員の充足状況によって、実施の有無や形態が影響を受けていることが示唆された。今後は、図書室登校を単なる別室登校の場所として利用するだけでなく、より教育効果を高めるような学校図書館ならではの活用方法を模索していくことが望まれる。

(指導教員 武田 将季)